

図版14 1.平坦面6遺構検出状況(南西より), 2.平坦面8遺構検出状況(南西より)

3.平坦面6遺構検出状況(北東より), 4.平坦面8遺構検出状況(南東より)

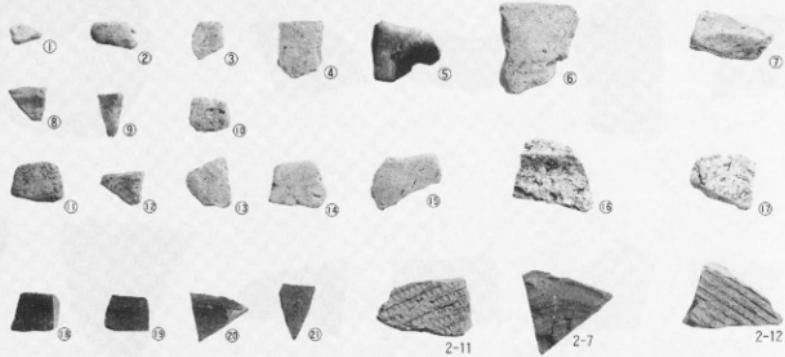
5.平坦面8遺構検出状況(南東より), 6.平坦面8遺構検出状況(南東より)



図版15 1.石垣遺構(南東より), 2.石垣遺構(北西より), 3.石垣遺構南側石組(北より)



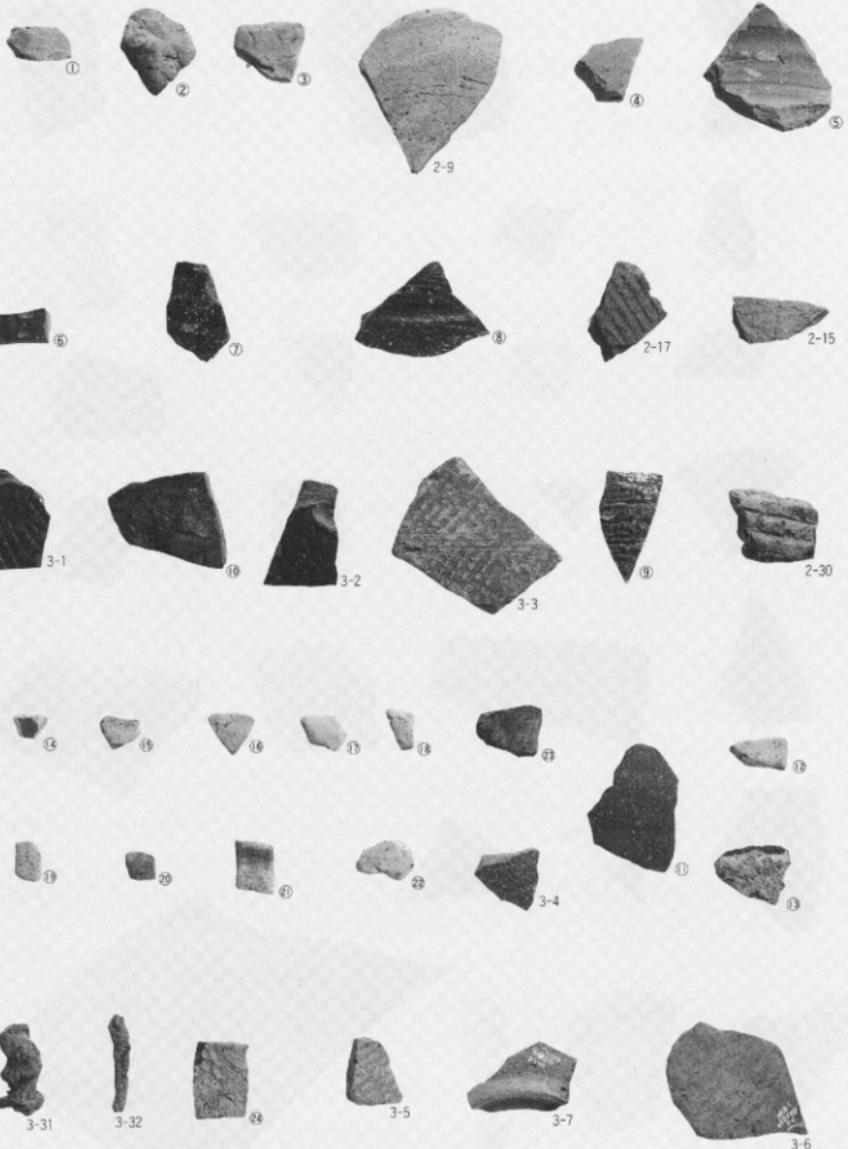
図版16 1.石垣遺構(北より), 2.石垣遺構(東より), 3.作業風景



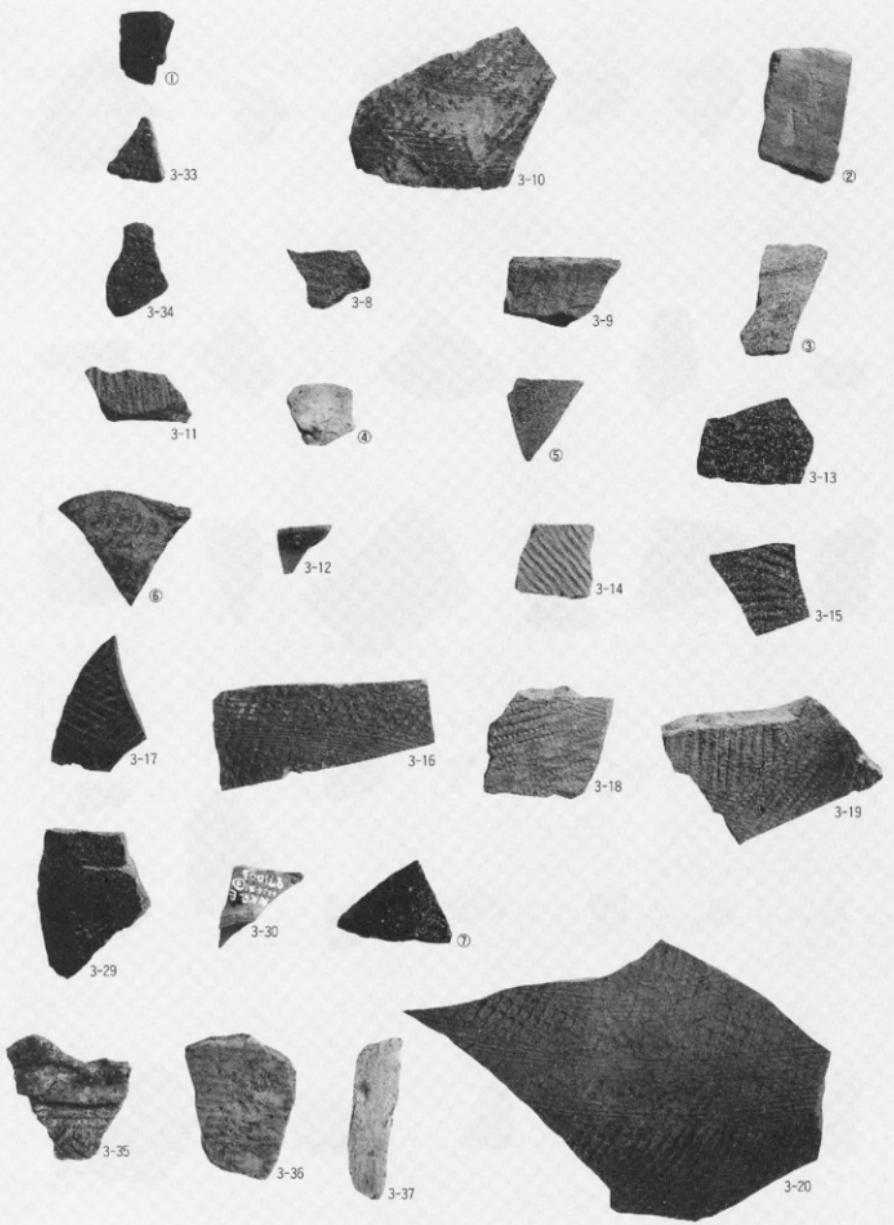
図版17 遺物写真 須恵器、土師器、瓦質土器、繩文土器 (図版2参照)
(縮尺1/2)



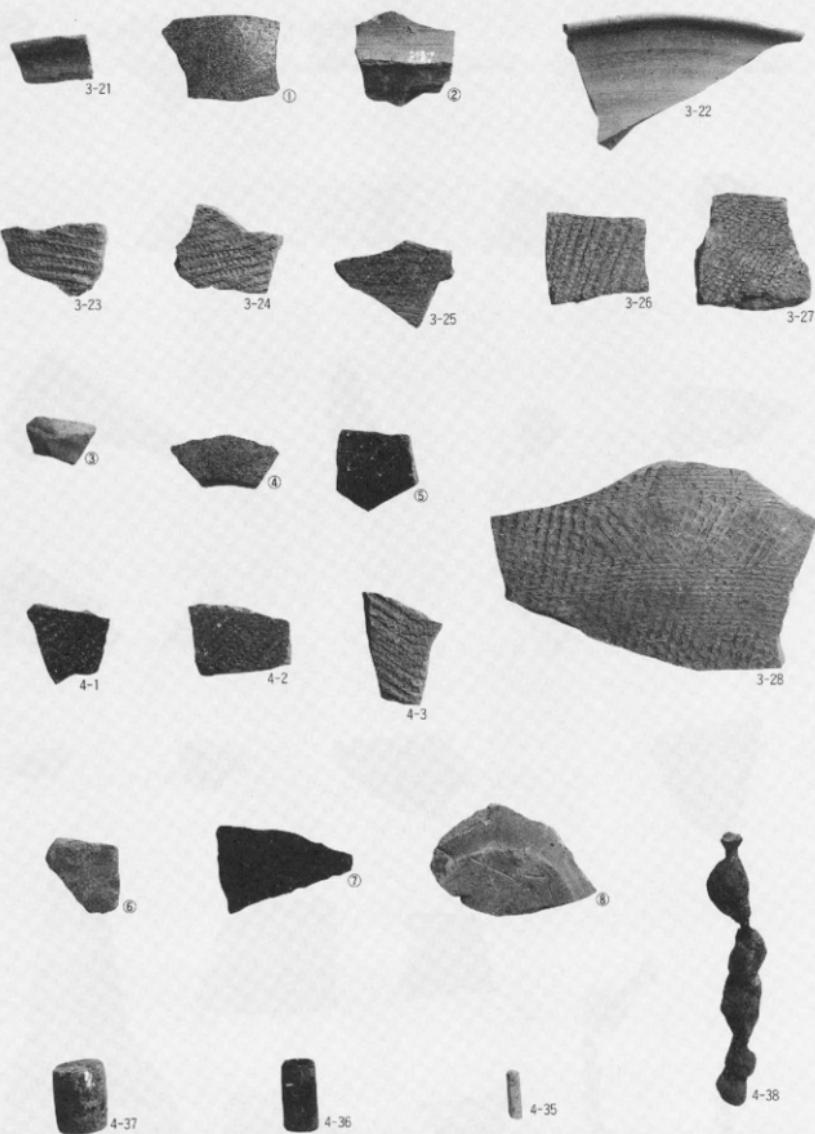
図版18 遺物写真 穀器、土師器、珠洲、縄文土器、石器 (図版2 参照)
(縮尺1/2)



図版19 遺物写真 須志器、土師器、越中漁戸、縄文土器、鉄製品(図版2、3参照)
(縮尺1/2)



図版20 遺物写真 須志器、土師器、越中漬戸、繩文土器、石器 (図版3 参照)
(縮尺1/2)



図版21 遺物写真 穀忠器、土師器、硬玉製品、鉄製品(図版3、4参照)
(縮尺1/2)



図版22 遺物写真 須恵器、土師器、瓦質土器、繩文土器、石器、鉄製品 (図版4 参照)
(縮尺1/2)



図版23 遺物写真 須恵器、越中漸戸、繩文土器、鉄製品 (図版4 参照)
(縮尺1/2)



図版24 遺物写真 須恵器、越中瀬戸、陶文土器、鉄製品（図版4 参照）
(縮尺1/2)

V 調査結果

4. 平成10年度の調査

(1) 伝承真興寺跡の調査・分布調査（黒川地区山間部）	167
(2) 真興寺跡の遺構配置について	175
(3)まとめ	176
引用・参考文献	177

挿図・図版等目次

第1図 遺構全図	178	図版1 伝承真興寺跡周辺航空写真	186
第2図 遺構実測図（平坦面1・VI・VII・VIII）	180	図版2 遺物実測図（平坦面1-I）	188
第3図 遺構実測図（平坦面7、盛土1・2）	182	図版3 遺物実測図（池周辺、平坦面1-III）	189
第4図 黒川地区周辺遺跡（墓場関係）分布図	184	図版4 遺物実測図（平坦面1-II・IV・V、平坦面2、山門）	190
		図版5 遺物実測図（平坦面1-II・V）	191
付図3 伝承真興寺跡遺構実測図 (平坦面1-I・II・III・IV・V、平坦面2)		図版6 遺物実測図（平坦面1-II・V、平坦面3・5・6・8・9）	192
付図4 伝承真興寺跡遺構実測図（平坦面3・4・5・6）		図版7 遺物実測図（平坦面8、山門、分布調査）	193
		図版8～19 遺構写真	194～205
		図版20～25 遺物写真	206～211

(1) 伝承真興寺跡の調査・分布調査

1. 遺構 (第1~4図、付図3・4、図版8~19)

真興寺跡は、標高約135mから125mの山中に占地する。谷地形の最深部に人為的に削平された平坦面が大小11ヵ所、形成されており各平坦面に基壇状の高まり5、礎石建物3、集石9、石列・盛土・池状の土壤などが検出された。遺跡のある山中と麓の黒川集落との比高差は、約100mで谷の開ける県道からの直線距離は、約400mでかなり急峻である。真興寺跡に向かう道は、真言宗の本院院裏の道から尾根伝いに参道が有り近年まで畑作や炭焼きの為の道として利用されていた(第4図)。

寺域と考えられる部分は総面積約3,200m²で、そのうち平坦面の総面積は約1,800m²であり、かなりの開削が行われている。

調査地区は当初大きな平坦面のある部分のみを対象としていたが、周辺に様々な平坦面や遺構が発見されたため全体像を明らかにすることを主目的とし個々の遺構についての発掘は次年度以降に行うこととした。この為以下の説明は現段階での観察結果であることを申し添えたい。以下平坦面ごとに説明を行う。

平坦面1 (第1・2図、付図3、図版10・11・12・16)

平坦面1は、今回の調査で最も規模の大きいもので約1,300m²を計る。説明のためこの平坦面を基壇状の高まりなどで平1-I~Ⅲの7ヵ所に区分して述べる。

平1-Iは、X79560~79580、Y21060~21090に位置し、基壇状の高まりに築かれた礎石建物を検出した。基壇は、周辺の平坦面から約50cmの高まりで築かれている。後世の畑作などの土地利用からほとんどの礎石は現位置を保っていないが、1ヵ所で現位置を保つ礎石と周辺に根石を検出、最終的に確認できた建物の規模は、5×4間、ないし4×4間で柱間約2.7mの比較的規模の大きい礎石建物として復元できるものと考えた。建物の向きはN45°-Eで後述する山門と考えた石段の位置から正面は南東側である。ほぼ寺域の中心に有ることから、本堂・金堂などの中心施設と考える。根石から出土した上師質の土器片は11世紀から16世紀代までかなりの年代幅があり明確ではないが、建て替えなどの可能性も考慮しなければならない。

平1-IIは、平1-Iの北隣に隣接して築かれた基壇状の高まりである。後世の畑作でやや削られた感があり高まりも30~50cmとやや低い。建物は今回の調査では検出できなかったが、何らかの施設が有ったものと想定している。平1-IIIは本堂のある平1-Iの南東側の地区である。この部分は北西隅に池状の土壤2ヵ所と石敷き溝と考えられる石列2ヵ所等を検出しており庭などを想定している。池1は、本堂奥の柱列の右側、平坦面1の北東隅にある。規模は、北東南西方向で3m、北西南東方向で2mであまり大きなものではないが、現在も水が湧き出ている。石敷きはこの池1の南西に作りつけられており、幅1m、長さ2mである。石は東西方向に整然と並べられているが、やや石と石の間隔があけられており、排水を考慮した施設である。この石敷きから本堂に石列1が見られる。この石列は本堂の礎石部分でとぎれるが石が南北方向に並んで続いているようであり、山門横の溝跡に続くものと考えている。

池2は、池1の南側約3mの位置にあり径約3mの不整円のものである。深さは約90cmであり、水が湧き出ているものではないが、池1が、雨水などで増水した際にそれを受ける形で配されている。池1・池2は底面に石が配されている。平1-IVは、本堂の柱列2列目横でやや傾斜し北西側と南東側に二つの平坦地を持つようで、池周辺に石が散乱するように分布している。石列2はその中にあり何らかの建物が配されていた可能性がある。集石5は、平1-Iの南隣に位置する。径約2mの範囲に固められており後述する参道を見下ろす位置にある。図上に表現はないがこの集石の左に山桜が、植栽されている。五本の幹に分かれているが、高さ約15mの大きなものである。遺跡の年代と関わることは思われないが、高野山などの寺院の古絵図などに桜が描かれていることを思うとこれも何らかの関連が有る物かもしれない。

れない。

平1-IVは、本堂の正面、南西側に当たる部分である。平1-IIIとは、溝跡により区分けした。約120m²の広さがある。全体に石が散乱するが、礎石に使われていたと思われる扁平な石や集石なども見受けられる。本堂のある平坦面とは約50cmの段差がある。この段差から約8m離て本堂正面の柱列とほぼ並行に石列・石垣が築かれている。石垣・石列の全長は、約15mで、そのほぼ中央に石段が築かれている。石段は、幅約3m、長さ約2mで北西側に長さ1m、幅50cm前後の石で石列が染かれ南東側は石垣で区切られている。石段は、4段で一部石が抜け落ちているが段の小口に整然と並べられている。石列・石垣の状況から山門を想定した。この部分での平1-IVと平2との段差は、約1mである。石段の位置は本堂中央には対応せず、本堂の1間分右側にずれており、石段も本堂中央に向くよう斜めに配されている。本堂と石列・石垣のほぼ中央に集石2・3がある。参拝者は、石段からこの集石の間を通り本堂正面に向かうことになる。神社仏閣に見られる魔をさける思想の現れと考えた。山門右側の石垣内と左側の石列下に五輪塔の火輪が検出されている。形状から15世紀後半のものと考える。本堂北西端の集石1は、方形で長さ幅とも約3mのものである。本堂関連施設の可能性が高い。集石4は、径約4mの範囲に石が固められている。集石6は、前述の集石5とほぼ同規模の径約2mの範囲に固められており両者の距離は、約26mを計る。その中央に石段があることから寺域区画の為のものかもしれない。

平1-Vは平1-IIの北西側で基壇状の高まりの下に当たる。後世の畑作の影響がかなりあり畠の跡などで掘削された跡が数多く残る。また、周辺に配されていたと考えられる礎石や集石も固められておりほとんど遺構と認識できる物は検出されなかった。ただ、一部地山に食い込んだ50cm前後の石があり何らかの遺構があった物と考えられる。

平1-VI、平1-VII、平1-VIIIは、本堂北西側の基壇状の高まりである。高さは、50cm前後でいずれも山際に作りつけられており規模はそれぞれ5×10m・3×8m・5×10mである。VIとVIIは、磁北にほぼ並行だが、VIIIは、本堂とほぼ並行で同時に存在した可能性が高い。のことから、真興寺跡は、2時期以上の遺構が存在する可能性が高い。いずれの平坦面にも大小さまざまの石が散乱しており今後の調査で何らかの施設が検出できそうである。

平坦面2（第1図・付図3、図版12・15）

平2は、前述の平1-IVの南西で山門前面の平坦地である。前述した山門北西の石列で区画され、右側が参道及び山門前の広場となるようである。参道は、この平坦面南東に伸びており尾根道へと続く。山門北西の比較的大きな石で築かれた石列は、その奥の平坦面への行く手を阻むように配されており、さらにその奥に平1-IVに向かう石段もしくはスロープ状の部分がありはじめはこの部分が参道であった可能性がある。このスロープ状の部分の西には、石垣とともに石積みとも付かない石が配されているが、この部分がどのように機能していたかは定かではない。いずれにしてもこの部分でも本遺跡が2時期以上ある可能性を示すものと考える。

平坦面3（第1図・付図4、図版9・13）

平3は、平1の南東に位置し、本堂の有る平坦面から約3m高まった削平地である。面積は、約110m²である。ここには、基壇状の高まりが設けられ方形の礎石建物が検出された。基壇は、底面で約6×6m、上面で約4.4m×4.4mで、この上面に3×3間の方形の絶柱建物を復元できる。柱間は真芯で約1m+1.3m+1mで礎石に一部欠落が見られるものの非常に整然とした作りである。礎石に使われている石は、外柱が40cm前後、内柱が20cm前後の凝灰岩である。基壇状の高まりの裾には上面の礎石にほぼ対応するように20cm前後の石が並べられており縁ないし庇などが考えられる。建物の規模、外柱と内柱などから三重塔ないし多宝塔など塔があったものと考えたい。とするならば、外周の石列は縁を設けるための礎石と考えられる。また基壇状と表現した部分も亀腹など塔の土台となる部分と想定される。この南東・北東側は崖が迫り縁付きの塔にしてはやや狭陥に感じられるが、崖が崩れ落ちていることもあり今後この部分も明確にしていきたい。この建物の正面は、本堂側で、そこに集石7がある。集石は径約2mの不正円で周辺にも

石が散乱している。また平3の北西側の等高線から地中に階段などの遺構が存在する可能性も秘めている。本堂南東端の柱列と塔北東端の柱列は、一直線上に並び距離は、約21mである。本堂の柱間が、2.7mであるところから、この柱間の約8倍の位置に築いたことになる。

平坦面4（第1図・付図4、図版9・17）

平4は、平3の北東に地続きにある。後世の掘削により一部欠落しているが元は、同一面と認識されていた可能性が高い。ここは、池1の東側で池周辺が庭とした場合、借景の部分となる。平面上に扁平な石があることから、何らかの施設があった可能性がある。平1との比高差は、約2.5mである。

平坦面5（第1図・付図4、図版9・14）

平5は、平1の南東、塔のある平3の東側直上に位置する削平面である。面積は、約60m²で、平1の本堂跡との比高差は、約10mで今回調査した地区の最高所にある。この平坦面の南東端に礎石建物を検出した。礎石は、1×2間分を検出したが、その奥に石が散布することから、最終的には、2×2間の建物として復元した。棟の向きはN58°-Eで、本堂、塔に比べやや東にふれる。礎石は、約30cm前後の丸い扁平な石を使用し、柱間は、北東南西方向で約1.3m北西南東方向で約1.5mで北西南東方向にやや長い建物である。立地などから、お堂などの建物を想起した。平1の本堂からは直線距離で約35.1mで本堂の柱間の約13倍の距離にある。この堂の北東に一見上砂崩れと見間違う傾斜がある。表土を除去しては居ないが、石段となる可能性がある。ここからは、富山平野の一部さらには能登半島まで一望できる。寺域の中でも重要な地区と想像される。

平坦面6（第1図・付図4、図版9）

平6は、平4の東、比高差約4mに位置する。15m²程度の小さな削平面であるが、平5から迂回するように幅30cmの小道が作りつけられている。地山に20から30cm前後の扁平な石があることから、東屋のような小さな建物が建つ可能性がある。

平坦面7（第1・3図、図版16）

平7は、本堂背後に広がる平坦地である。一部に昭和初期に炭焼き窯として利用された部分があり必ずしも元の地形を残しているわけではないが、おおむね幅5m長さ31mで約155m²の広さがある。本堂のある平1とは比高差約1m前後である。さらにその北東比高差約1.5mに土礎様に築かれた、盛り土1・2がある。この盛り土の周囲は溝状に削り取られ通路としても機能していたようではほぼ同一レベルで平1-II背後まで伸びている。盛り土1には1辺約1.5mのほぼ方形の巨石が1個おかれている。寺域を示す結界かもしれない。

平坦面8・11（第1図、図版15・17）

平8は、平2の直下、山門の石段の南西に位置する。平2との比高差は、約5.2mである。面積は、約30m²程度の小さな面である。ここには、径約2m、深さ約90cmの土壙がある。この土壙の周辺には、人頭大から拳大の石が散乱し、中に15世紀末のものと考えられる五輪塔の火輪が出土している。堀片に標部が残ることから墳墓であった可能性が高い。後代、真興寺が、富山に移転した際に掘り出されたものかもしれない。この平8の西に平11がある。山際に横穴が認められるが、詳細は次期調査にゆだねたい。

平坦面9（第1図、図版17）

平9は、平2の西側直下、平8の北西隣に広がる平坦面である。平坦部の面積は約190m²で平1との比高差は、約4.5mである。この平坦面には、集石8・9・10がある。集石は、径約2m前後のもので高さ60cm程度に積み上げられている。積み石墓となるものと考えた。16世紀後半の越中瀬戸が含まれる。この平面は、南側で平8につながるが、ここに向かう部分に人頭大の石が一部列をなすように並べられており、通路となっていたものと考えらる。直上の平1・2とのように結びつくか調査が必要である。

平坦面10（第1図、図版17）

平9の北側に谷を隔てて平10がある。面積は、約50m²で平1との比高差は約5mである。ここでは今のところ遺構は検出していないが、北側山裾に湧水地点を確認した。この湧水は、最近まで麓にあった本覚院で利用されていたとのことで、湧水用のパイプが取り付けられていた。水は、四季を通じてとぎれることが無く、現在も湧きだしている。

以上、遺構について現在までに判明した点と想定した建物について述べたが、調査が、寺域全体の把握に主眼をおいたため個々の造構に付いての分析と調査が不十分である。次年度以降試掘を含め再調査を行う予定である。しかしながら、中世の山岳寺院で寺域約3,200m²にも及ぶ大規模な遺構が確認され、上山古墓群とのつながりもあるものと見られるところから黒川から護摩堂に至る谷全体が、大きな宗教空間であった可能性が再確認されたことは大きな成果と考える。今後さらに周辺部の調査を継続する必要がある。

黒川集落背後の山間部の分布調査について（第4図・図版19）

真興寺跡の調査に並行して寺域から上山古墓群に至る黒川村背後の山間地の分布調査と簡易測量を実施した。調査は、富山大学人文学部国際文化学科考古学研究室の全面的なバックアップの下、調査担当者及び富山大学教授宇野降夫氏の指導で行った。調査は、対象域をおおむね尾根筋ごとに4地区に分けそれぞれに人為的に作り出された平坦面の有無と、真興寺跡背後の山地の山頂部に広がる平坦面の観察を5班に分けて実施した。その結果、大小5カ所の平坦面を確認した。またこれらの地区がどのように結びつくか徒歩によりその距離感を確認した。

平1は、調査区最高所の標高200m前後の地域である。真興寺跡背後の山の山頂部分で、真興寺跡から5分、行者窟である穴の谷霊場からも約8分程度でたどり着ける。ここには山頂部とその下の尾根上に2段の平坦部を確認した。山頂部が182m²、その下の尾根が1,300m²とかなり広い。山頂部には、道と見られる窪みが、南東から北西に約20m確認される。

平2は、平1の南で標高110m付近にある。平1からは3分程度の距離感である。250m²と50m²の2段の平坦面が確認される。周辺に2m前後の高まりが確認される。

平3は、平2の南西で標高100m付近にある。谷の最深部にあり約50m²の面積である。この部分には、集石が3カ所程度確認され、集石墓と考えた。

平4は、上山古墓群の西、標高約50mの日枝神社の背後に広がる地域で水田畑も含めて大小16にも及ぶ平坦面が確認される。このうち山地を開削して作り出されたと見られる平平坦面が2カ所あり右列・集石がいくつも確認された。日枝神社を含めてかなり大規模な施設があったものと考えられる。面積は最も大きい物で約3,000m²小さい物で50m²であった。

平5は、本覚院東の標高50m付近の平坦面で現在畠地となっている部分である。5カ所の平坦面があるが、面積は、約3,000m²のものが2カ所、50m²が2カ所、160m²が1カ所である。付近からは、9世紀代から10世紀代の須恵器や土師器片が多数表面採集できる（図版7・25）。また、16世紀代のものと考えられる径約30cm高さ約50cmにも及ぶ立輪塔の風空輪が検出された。地元の方の話では、昔ここに神社があったという言い伝えがあると言う。

これらの平坦面は、真興寺跡、上山古墓群、穴の谷、日枝神社を含めすべて平1のある山地から尾根あるいは谷を介して20分程度でたどり着け相互に関連するものと考えられる。八峯八谷あるいは八峯庵台の地を裏付ける結果となつた。今回に調査は、黒川集落背後の山間地に限定した調査であったため、今後さらに地域を広げ黒川から護摩堂に至る谷全体の詳細な分布調査が必要である。今回の調査から谷全体が大きな靈場であった可能性が大きく、このような平坦面あるいは遺構が発見される可能性が高い。

2. 遺物（図版2～7、図版20～25）

調査により検出した遺物は、土師器・須恵器・珠洲焼・越中瀬戸・唐津・鉄製品などである。ほとんどの遺物は、表土を排除し造構面を検出する際に出土した。遺物は、時期によって量に違いがあるものの、9世紀から18世紀までの時間幅をもっている。しかし、旧真興寺が9世紀から18世紀まで継続して存在したとは考えにくく、出土遺物もすべての時期のものが見られるわけではない。以下、造構ごと、図版ごとに遺物の特徴を述べる。

本堂出土遺物（図版2・20・24）

図版2の1～35、図版20の①～⑨は本堂からの出土である。図版2の1～14は土師器である。1～9は土師器皿の口縁部で、口径は8～15cmである。1・2・4は、内外面に炭化物が付着する。15～16世紀のものと考える。このうち1・2は、本堂の根石検出部分からの出土である。10・12・14は土師器皿の底部である。いずれも底部は回転糸切りであるが、摩滅が著しい。12世紀代のものと考える。11は柱状高台をもち、底部は回転糸切りである。底径は4.4cmを測る。13は蛇の目高台で、高台は低く、断面三角形である。高台径5.4cmを測る。11・13は11世紀代のものである。なお11・13は本堂の根石検出部分からの出土である。15～20は須恵器である。15は杯蓋で、内外面縁轆回転撫で調整を施し、口縁端部は巻き込んで丸くおさめている。16は皿の底部である。高台は断面二角形で、内外面回転撫で調整が施される。17～20は壺の体部破片である。17・18は外面に擬格子状平行叩き、内面に同心円紋を施す。19は外面に擬格子状平行叩き、内面に平行線紋、20は外面に平行叩き、内面に扇形紋を施す。このうち17は、本堂の根石検出部分からの出土である。15～20は9世紀代のものと考える。21・24は越中瀬戸の皿である。24は体部下半から口縁部まで直線的にのび、内面は全面に外側は体部に鉄釉を施す。22・23は無釉の陶器である。25～28は越中瀬戸である。25の丸碗は体部下半に丸みを帯び、鉄釉を施す。削り出し高台で、高台部分は無釉である。底部は中心に向かって円錐状に削られ、高台の外側端部は面取りされている。26は蓋と考えられ、鉄釉を施す。27は内外面鉄釉が施され、器形から水指として使用されたものであろう。28は擂鉢で、口縁端部は屈曲して立ち上がる。体部は縁轆撫で、全面に鉄釉が掛かる。鉗目は左回りに、幅2.4cmに10条1单位で施される。21～28は18世紀代のものと考える。29は口径16cmの皿である。30は唐津の擂鉢である。口縁部外面が丸く肥厚し、口縁部外面に鉄釉を施す。口径32cmを測る。18世紀代のものである。31は瓦器で、近世のものと考える。32～34は鉄釘である。いずれも鉛がひどいが、32は丸釘である。35は拓本では読みにくいが、寛永通寶である。

この他本堂からの出土遺物には、図版20の①～⑨がある。①・②・⑤・⑥は土師質の破片である。①は内外面赤彩が施された皿または碗の破片である。③・④は須恵器片である。③は壺の口縁部、④は壺の頸部と考えられる。⑦は、図版2の30と同一個体と考えられる。唐津の擂鉢で、口縁部外面が丸く肥厚する。鉗目は細い。18世紀代のものである。⑧は產地不明の陶器の皿で、灰釉を施す。⑨は青磁片で、本堂前面の石列付近からの出土である。

池周辺出土遺物（図版3・21・24）

図版3の1・2は土師器皿である。1は池1南西側の石敷から検出した。口縁部に横撫でを施し、端部を上方へわずかに摘む。口径は9cmを測る。内外面に炭化物が付着する。2は池2の肩から出土した。口縁部に横撫でを施し、口縁端部を上方へ小さく摘んでいる。摘み上げた端部の内側に溝が走る。口径は9cmを測る。1・2は、16世紀代のものと考える。3・4は池1の南側から出土した。3は越中瀬戸の皿で、体部下半から口縁端部まで直線的である。内面は全面に、外側は体部に鉄釉を施す。口径10cm、底径4.5cmである。4は越中瀬戸で、器形から水指と考えた。底部外面以外の全面に鉄釉を施す。轆轤目が明瞭で、底部は回転糸切り未調整である。口径11.4cm、底径12.8cmである。3・4は18世紀代のものである。5～7は石列1周辺からの出土である。5は珠洲焼の擂鉢である。破片が鉗目の途中で割れているため、原本の幅、条数は不明であるが、残存部分で1.1cmに4条を数える。15世紀代のものと考える。6は花瓶の口縁部で、灰釉が施されている。轆轤目が明瞭で、口径9.2cmを測る。7は6と同一個体と考えられ、底径7cmである。

平坦面1—Ⅲ出土遺物（図版3・21）

図版3の8～10は土師器皿である。8は口径8cmで、内外面に炭化物が付着する。9は口径11cmである。10は口縁部を横拂でし、口縁端部を上方へ小さく摘む。口径は12.2cmである。この他、平坦面1—Ⅲ出土の土師器皿は、図版21の①・②である。いずれも15～16世紀代と考える。11は須恵器の壺である。口径21.5cmを測る。口縁部は端部が上下に拡張する。外面に自然釉がかかる。この他須恵器は、図版21の③で、杯蓋である。口縁端部は巻き込み、調整は牠轆回転拂である。須恵器は9世紀代のものと考える。12は珠洲焼の擂鉢である。鉗目は密度が高く、2cmに7条を施す。15世紀代のものと考える。14・15・17は越中瀬戸の皿で、体部下半から口縁部まで直線的にのびる。内面は全面に、外面は体部に鉄釉を施す。13・16・18は無釉の陶器である。19は口径8cmで、内外面鋸歯を施す。越中瀬戸の広口壺であろう。20は筒形の碗である。鉄釉を施す。21は越中瀬戸の匣鉢である。匣鉢目が明瞭で、口径は18.3cmである。外面に鋸歯が掛かる。22は越中瀬戸の擂鉢である。口縁部が内側に折り返され、内面に凸帯をもつ。端部上面は斜んでいる。鋸歯が施され、口径は28cmを測る。23は鉢をもち、茶釜かと考える。内外面茶褐色の鉄釉を施す。24は皿で、見込みは蛇の目釉剥ぎである。25は見込みに山水文を描く。底部は無釉であるが、底部以外の全面に透明釉を施す。26は丸付で、見込みを蛇の目釉剥ぎとする。13～26は18世紀代のものと考える。27は鉄釘である。鋸がひどいが、角釘で、頭部は片側から折り曲げた形態のものである。

溝跡出土遺物（図版22）

図版22の④は、平坦面1—Ⅲ・Ⅳ間の溝をつくる右列から検出された。須恵器で壺の体部と考えられる。外面には自然釉がかかる。

集石1出土遺物（図版4・22）

図版4の1～5は集石1からの出土である。1は土師器皿で、口径8cmである。摩滅が著しいが、内外面に炭化物が付着する。2は珠洲焼で、壺の体部破片である。3は越中瀬戸の擂鉢である。鉗目は左回りで、2.3cm幅に12条1単位である。鉄釉が施される。4は皿で、体部はやや内湾しながら立ち上がる。内面は緑青色の銅綠釉を施し、内底面を蛇の目釉剥ぎする。外面は、体部下半まで灰白色の灰釉を施す。削り出し高台で、高台径は6cmである。17世紀後半から18世紀のものである。5の皿は内禿皿である。高台付近は無釉の削りだし高台で、高台の断面は逆三角形を呈する。見込みに煤が付着する。

平坦面1—Ⅳ出土遺物（図版4・22）

図版4の6～12は、平坦面1—Ⅳからの出土である。6は柱状高台のつく碗である。底径は4.1cmで、同軸糸切りである。12～13世紀のものと考えられる。7～9は須恵器である。7は杯蓋で口径13cmを測る。口縁端部は巻き込む。頂部と縁部の境目に帯状の回転範囲を施す。内面は回転拂で調整である。8は杯で、口径12.8cmを測る。底部は回転範囲切りの後に拂で施す。その他の部分は回転拂で調整である。9は壺の体部破片である。外面に擬格子状平行叩き、内面に同心円紋を施す。須恵器は9～10世紀代のものである。10は越中瀬戸の皿である。内面に鉄釉が施され、底径は3.4cmである。18世紀代のものである。11は磁器の御仏飯で底径4.1cmである。呉須で線が描かれる。12は細長い立方体に3本の線を刻み、3本の線が刻まれた面の上部と下部を面取りする。また裏面の上部も面取りしている。底部は敲打したような跡を呈するが、他の面は良く磨かれている。石製で、重さは86gである。この他平坦面1—Ⅳ出土遺物には、図版22の③・⑦がある。③は土師器片、⑦は唐津の擂鉢で、口縁部外面が丸く肥厚する。

山門出土遺物（図版4・7・15・22）

図版4の13～15は山門石列部分からの出土である。13は越中瀬戸の広口壺である。口径は13cmで、18世紀代のものである。14は越中瀬戸で壺の体部破片である。内外面鉄釉を施す。15の碗は、外面に6条の線が引かれ、内外面鋸歯が施されている。13～15は18世紀代のものと考える。16は山門西側隅の石垣からの出土である。珠洲焼で壺の体部破

片である。図版7の2~4は五輪塔の火輪で、石段の左右から出土した。2は石段東側、3・4は石段西側からの出土である。軟質な凝灰岩である。いずれも1辺14cmほどで、軒反りは小さい。

平坦面2出土遺物（図版4・22）

図版4の17~20は平坦面2からの出土で、すべて越中瀬戸である。17は皿で、内面に鉄袖を施す。18・19は丸碗である。体部下半は丸みを帯び、18の口縁部は直線的に立ち上がる。削り出し高台で、高台断面は逆三角形である。体部には鉄袖を施す。20は広口壺で、内外面に鋳袖を施す。17~20は18世紀代のものである。

平坦面1—I出土遺物（図版4・22）

図版4の21~23は平坦面1—Iからの出土で、土師器皿である。21は口径10cm、22は口径9cm、23は口径11cmである。21・22は摩滅が著しい。この他平坦面1—I出土遺物は、図版22の①・②・⑥である。①・②は土師器片である。⑥は小破片だが、内面に緑青色の釉を施す。

平坦面1—V出土遺物（図版4・22）

図版4の24~33は平坦面1—Vからの出土である。24~27は土師器皿である。口径は10~14cmである。25・26の口縁部の調整は横撫である。口縁端部を上方にわずかに摘み、摘んだ内側に溝が入る。土師器皿は15~16世紀のものである。28は須恵器で、壺の体部破片である。外面に平行叩き、内面に扇形紋を施す。9世紀代のものと考える。29~31は、珠洲焼の壺の体部破片である。32は碗と考えられる。轆轤目が明瞭に残り、内外面に鋳袖が掛かる。33は砥石で、144gを測る。なお平坦面1—V出土遺物には、図版22の⑤の珠洲焼片が含まれる。

平坦面1—I・V周辺出土遺物（図版5・6・23・24）

平坦面1—I・V周辺には、後世畠を耕作した際に集められた石が積まれていた。この石積みは位置的に、平坦面1—I・Vの石を中心としたと考える。図版5の1~21・図版6の1~8は、この石積みを取り扱った際に採集されたものである。以下、図版ごとに説明する。

図版5の1~6は土師器皿である。3は手づくねで、口縁部を強く一段横撫する。6の底部は回転糸切りである。3・6は、内外面に炭化物が付着する。15世紀のものと考える。7は須恵器で壺の体部破片である。外面に平行叩き、内面に扇形紋を施す。8~16は珠洲焼である。8は壺の口縁部で、口縁部と頸部に齒歯状工具によって波状文を施す。珠洲Ⅲ期、13世紀後半に比定できる。9は壺で、口縁部直下から叩きを施す。珠洲Ⅳ期のものと考える。10~14は壺の体部破片、15・16は擂鉢である。15・16は同一個体と考えられ、鉢目は2cmに7条である。15世紀代のものと考える。17~21は越中瀬戸である。17は皿で、体部下から口縁部まで直線的にのび、内面全面と外面部に鉄袖を施す。18は壺の底部と考えられる。内外面鉄袖が掛かる。底部は回転糸切り、底径は9.5cmである。19は大きな皿の底部と考える。内外面鉄袖が掛かる。20は擂鉢で、口縁端部が屈曲して立ち上がる。内外面鉄袖を施す。口径は27cmである。21は匣鉢の蓋である。17~21は18世紀のものである。

図版6の1・2の皿は、内底面を蛇の目輪剥ぎする。高台は逆三角形状に削り出している。3は皿で内面は緑青色の釉を施し、外表面は灰白色の釉を施す。4は草花文を施す。5は簡茶碗の底部である。1~5は18世紀代のものである。6は鉢で、口径11.4cmである。3条の沈線を施し、内外面鉄袖を施す。図版6の7と、図版24の①~④は、図版6の6と同一個体と考える。8は唐津の擂鉢である。口縁部外表面が丸く肥厚する。口縁部内面には段がめぐる。鉢目溝は広めで細い。鉢目は、5.1cm幅に14条1单位である。18世紀代のものである。

平坦面3（塔跡）出土遺物（図版6・25）

図版6の9・10は平坦面3より出土した。9は越中瀬戸の匣鉢である。体部は直立し、筒状を呈する。轆轤目が明瞭に残り、外表面に鉄袖が掛かる。10は鉄製品である。緩く反った板状を呈する。

平坦面5（堂跡）出土遺物（図版6・25）

図版6の11は平坦面4からの出土である。土師器皿で口径は9cmである。内外面に炭化物が付着する。

平坦面6出土遺物（図版6・25）

図版6の12は平坦面6からの出土である。土師器皿で口径は8.3cmである。炭化物が付着し、灯明皿と考える。

平坦面8出土遺物（図版6・7・25）

図版6の13～15は平坦面8からの出土である。13は須恵器で壺の体部破片である。外面は擬格子状平行叩き、内面は同心円紋を施す。9世紀代のものと考える。14は越中瀬戸の皿である。内面に鉄釉を施す。15は越中瀬戸の壺である。肩部に耳が付けられている。外面に鉄釉が掛かる。図版7の1は五輪塔の火輪である。1辺10cmほどで、四隅の棱線はほぼ垂直に下りる。この他平坦面8出土遺物には、図版25の①、土師器皿片がある。

平坦面9出土遺物（図版6・25）

図版6の16～19は平坦面9からの出土である。16は土師器皿で、口径9cmである。17・18は珠洲焼の搖鉢である。17の口縁端部は、弱く屈折し丸みを帯びる。端部内面に櫛齒波状文を施す。珠洲Ⅶ期に比定した。18の鉗目は、2cmに6条を施す。15世紀代のものと考える。19は越中瀬戸で、3足の皿と推定するが、破片のため4足の可能性もある。黒川窯、16世紀後半のものと考える。

廃土（図版6・25）

図版6の20は廃土上より得た。青磁で碗の底部と考えられる。底径は6cmである。

分布調査採集遺物（図版7・25）

図版7の5～21・図版25の②～⑧は、分布調査の際に本覚院裏の平坦面5より採集したものである。図版7の5・6は土師器の碗で内外面赤彩を施す。7～14は碗・皿の底部である。7～10・13・14の底部は回転糸切りである。11・12・15は高台がつく。11の高台は低く、断面三角形を呈する。7・8・13は内外面に赤彩を施す。16は壺の口縁部で、口縁端部を巻き込んでいる。17は壺の頸部である。18・21は壺の体部破片である。18・20・21は叩きと当具跡を残す。図版25の②～⑧は土師質で壺の体部破片である。いずれも9～10世紀代のものと考える。

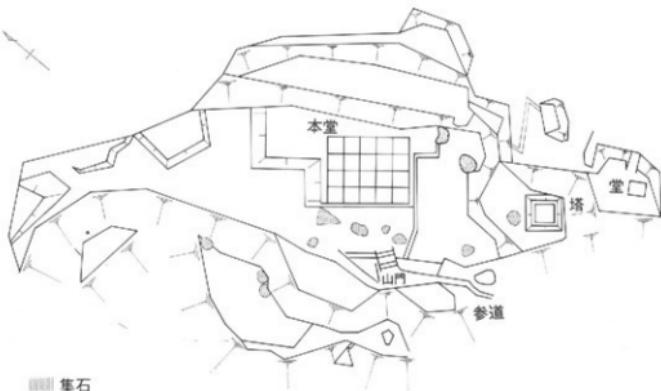
(2) 真興寺跡の遺構配置について

真興寺跡で検出された遺構について若干の整理を行いたい。古代寺院に見られるような正確な伽藍配置はないにしても調査中から、本堂・塔・堂に計画配置の意図が読みとれそうであると考えたからである。

まず、本遺跡の中心施設である本堂と考えた建物の規模は、柱間約2.7m、5×4間で建坪約145.8m²であった。その南西に塔跡と考えた建物があり、規模は、礎石の心芯で1+1.3+1m四方で建坪10.89m²、縁が付く場合基壇裾の石列から6×6mの建物と見ることもでき約36m²の建物となる。このことから本堂は、塔の約4倍の面積の建物となる。又、本堂南東側の正面に当たる柱列は、直線で塔の北西端の柱列とは一直線で結ばれ、本堂南東端と塔北西端の距離は、18.9mで本堂柱間2.7mの7間分に相当する距離に作られている。堂は、北西方向と北東方向でやや柱間が異なるが、(1.3×2) + (1.5×2) の建物と復元すると建坪は約7.8m²の建物となり、塔の約1/5の規模となる。建物の軸は、本堂・塔とはややずれるが、本堂2列目の柱列が、堂の中央の柱列とは直線で結ばれ距離は約36.5mを測る。本堂の柱間が2.7mであることから、約13.5間分の距離となる。このことからかなり大胆ではあるが本堂から塔・堂の距離は本堂柱間の約7倍と14倍となりほぼ等間隔に築こうとしたのではないかと考える。また、建物の大きさは本堂：塔：堂でおおむね20:5:1の比率となる。

本堂周辺の敷地を見ると本堂南東の平1-Ⅲは、塔のある半30の崖下で本堂から約9.45m、本堂北西の平1-Ⅱは、基壇状の高まりの上場で約9.6mではほぼ等距離で本堂柱間の約3.5倍である。本堂正面の平1-Ⅳは、本堂から山門と考えた石列までの距離8.2mを計り、本堂柱間の約3間分に相当する。

平1の基壇状の高まりの内、平1-Ⅵ・Ⅶは、他の高まりと軸方向が約45°ずれておりほぼ磁北に平行でありこの2つの平坦面が時期を異にする可能性が高い。遺物からの時期決定が今後必要でありさらに詳細な試掘を行う予定である。以上本堂周辺の建物配置と敷地利用についてみたが、寺院施設が、すべて同一平坦面に築かれたものではなく山岳寺院に近い配置をなすことからかなり大づかみな分析と整理に終始した。識者のご意見を伺いたい。



遺構配置概念図

(3) まとめ

本遺跡についていくつかの検討を試みたが、その中で得られた見解を整理し、まとめに変えたい。

1. 本遺跡は、地元では俗称「フルデラ」と呼ばれる地域であり、古くから寺院があった場所として言い伝えられていた。検出された遺構から山岳寺院であることが確認された。
2. 標高は、約135mから120mの山中で麓の黒川村との比高差は、約100mとかなりの高所に所在する。
3. 遺跡のある山地麓の本覚院の寺伝によれば、この寺は、真興寺といい開山は、東密小鳥流の真興僧都で今から約千年前に開山したという。真興僧都は、中興期（11世紀）の高野山にあっては、南院の建立を手がけた人物として紀伊国續風土記にある人物で高野山とのつながりも暗示させる。
4. 検出した部分は、寺域約3,200m²でこの中に大小11カ所の平坦面を確認した。遺構は、平坦面1で本堂跡・山門跡・池跡・基壇状の高まり・集石・石列・平坦面2で参道跡・石列・集石・石垣・平坦面3で塔跡・集石・平坦面5で堂跡・石段？・平坦面7の背後に盛土（墓跡か）、平坦面8で土壙（墓跡か）、平坦面9で集石（墓跡か）、平坦面10で湧水地、平坦面11で横穴、と数多くの施設があることを確認した。
5. 平坦面の標高の最も高いものは平5で約133m、最も低い平11では約114mで比高差19mでかなりの高低差がある。本堂のある平1と堂のある平5の比高差も約10mと大きく山地の形状に合わせ各平坦面が開削されたことを物語る。
6. 本堂、塔、堂は規模で20:5:1の比率で、本堂南西端からの距離は、塔・堂の北東端までの距離は、約19.4mで等間隔となる。又本堂周辺の平坦地もほぼ同一の規格で造成されたよう、山地の中とは言いながら計画的な配置を意図したことがうかがわれる。
7. 出土した遺物は、土師器、須恵器、珠洲焼、越中瀬戸、唐津、鉄製品、砥石、五輪塔などで、9世紀から18世紀までの遺物が出土している。
8. 遺物は、9・15・16・18世紀代の遺物が目立ち、10・11・12・13は量がやや少なくなるものの、底部や口縁を残す良品が目立つ。しかしながら14・17世紀代の遺物はほとんど出土せず、18世紀の陶磁器などが一気にその量を増加させる。
9. 調査が、遺構検出に終始し、ほとんど発掘していないこともあろうが、寺院の移転が16世紀末頃と寺伝から推察されることから、17世紀代の遺物が少ないものと考えられる。18世紀に増加するのは、炭焼きなど跡地利用が盛んになった為と考えられる。
10. しかしながら、14世紀代の遺物がほとんど見られないのが気にかかる。本遺跡の南東約500mにある上山古墓群でも14世紀代に造墓活動がとぎれ15世紀代に入り五輪塔をもつ墓が成立し終焉を迎える。この現象が、14世紀の遺物が少ない本遺跡でも発生しており2遺跡が不可分の関係にあったことがうかがえる。
11. 本遺跡の麓の本覚院裏手に越中瀬戸の黒川窯がある。16世紀代の成立と考えられ、16世紀代の本遺跡の遺物の越中瀬戸は窯道具の転用品も含め黒川窯のものと考える。

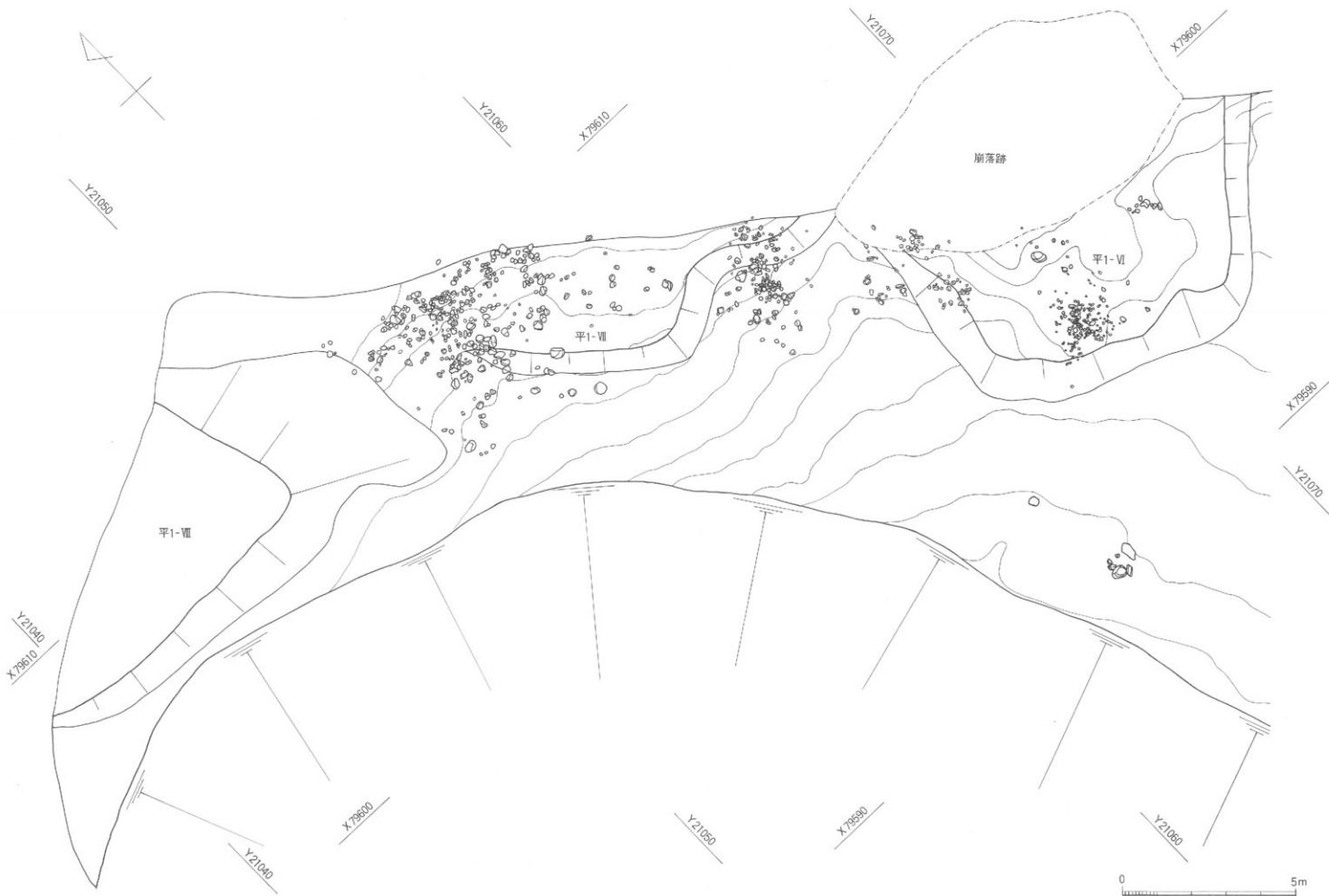
以上であるが、本遺跡が古代から中世全般にわたり何らかの土地利用がなされていたことが今回の調査で明らかとなった。しかしながら多くの遺構を検出した真興寺跡の成立年代が今ひとつ明らかではない。今後さらに調査を加えその点を明らかにしていきたい。これまで上山古墓群の発見以来、年次的に調査を実施してきたが、今年度の調査で寺院の存在も明らかとなった。この2遺跡が同時代に存立し不可分の関係にあったことが次第に明らかとなった。また周辺地域にも関連すると見られる遺跡が数多く発見された。次年度以降、谷全体の調査を実施し中世全般にわたる宗教空間としての本地域のあり方を明らかにしていきたい。

引用・参考文献

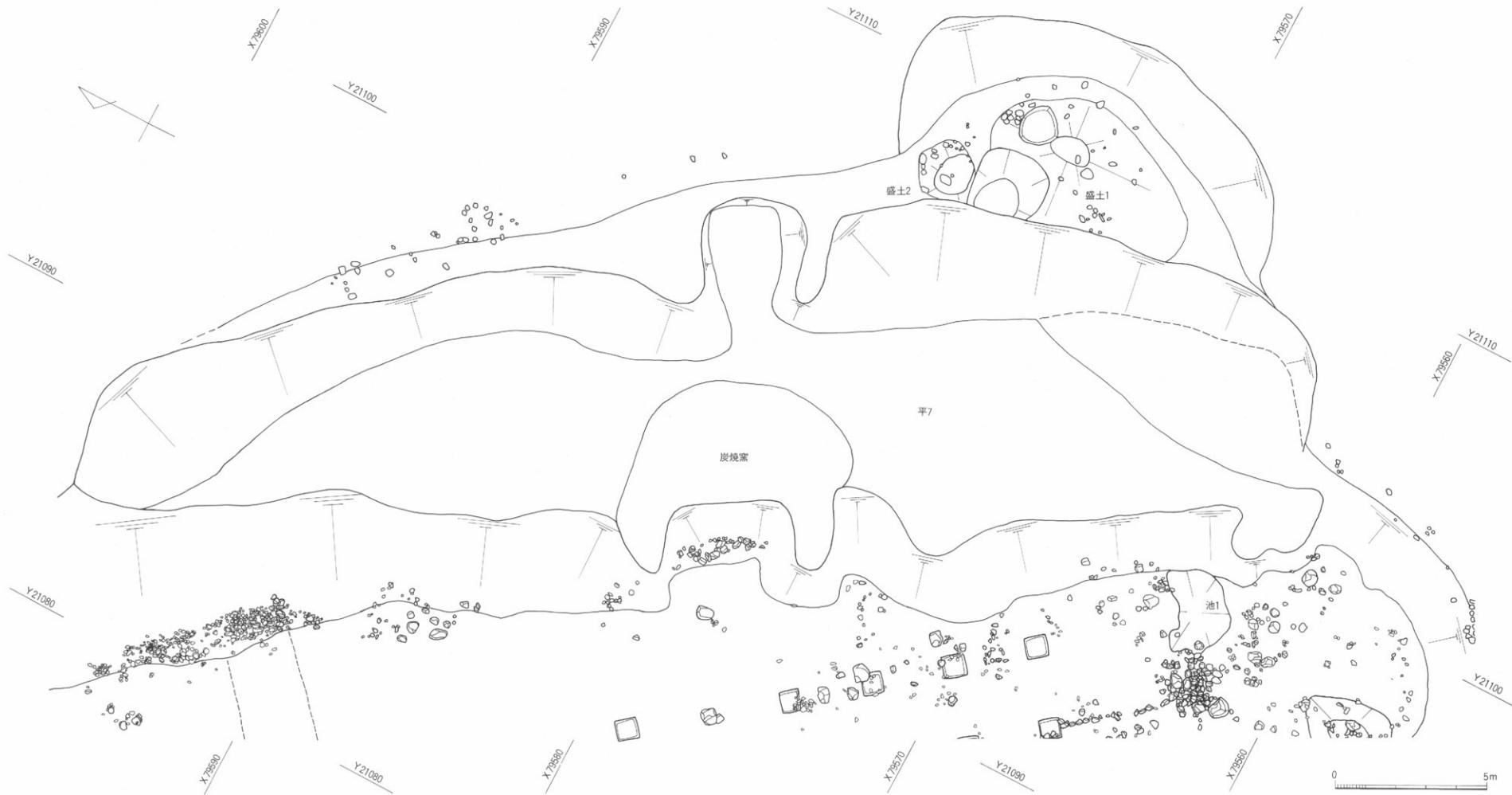
- ア 石田茂作 1984 「伽藍配置の研究」『新版仏教考古学講座 第2巻寺院』
伊藤延男 1978 「密教建築」『日本の美術143』 至文堂
上田篤 1996 「五重塔はなぜ倒れないか」 新潮選書
内田進紀子 1997 「越中における古代土師器の編年予察」 『埋蔵文化財調査概要一平成8年度一』(財)富山県
文化振興財団 埋蔵文化財調査事務所
宇野隆夫・西井龍儀他 1993 「第二章 医王の山と里の遺跡を探る」『医王山文化調査報告書 医王は語る』
福光町・医王山文化調査委員会
大橋康二 1989 「肥前陶磁」 ニュー・サイエンス社
奥田直栄 1972 「古瀬戸の階級制」『陶磁大系 第六巻 古瀬戸』 平凡社
カ 上市町 1970 『上市町誌』
上市町教育委員会 1995 『富山県上市町黒川上山古墓群発掘調査概報』
上市町教育委員会 1997 『富山県上市町黒川上山古墓群第2次発掘調査概報』
上市町教育委員会 1998 『富山県上市町黒川上山古墓群第3次発掘調査概報』
元興寺文化財研究所 1982 『高野山発掘調査報告書』 考古学研究室調査報告書 第3冊
「紀伊続風土記」 1975 戴南堂復刻
倉田文作 1967 「密教寺院と貞觀彌刻」『原色日本の美術5』 小学館
サ (財)富山県文化振興財団 埋蔵文化財調査事務所 1996 『梅原胡麻堂遺跡発掘調査報告(遺物編)―東海北陸自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告II―』
(財)富山県文化振興財団 埋蔵文化財調査事務所 1998 『五社遺跡発掘調査報告 一能越自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告I―』
(財)和歌山県文化財センター 1990 『金剛峯寺遺跡』
タ 田辺征大・森郁夫 1986 「2仏教A寺院の造営」『日本歴史考古学を学ぶ(中)』有斐閣
富山県 1984 『富山県史 通史編Ⅱ 中世』
富山大学人文学部考古学研究室 1989 『越中上末塗』
ハ 日野西真定 1983 『高野山古絵図集成』
法藏館 1931 『密教大辞典』
マ 宮田進一 1988 「越中瀬戸の窯資料(1)」『大境』第12号
ヤ 吉岡康暢 1994 『中世須恵器の研究』 吉川弘文館
ワ 和歌山県 1994 『和歌山県史 原始・古代』
和歌山県 1994 『和歌山県史 中世』



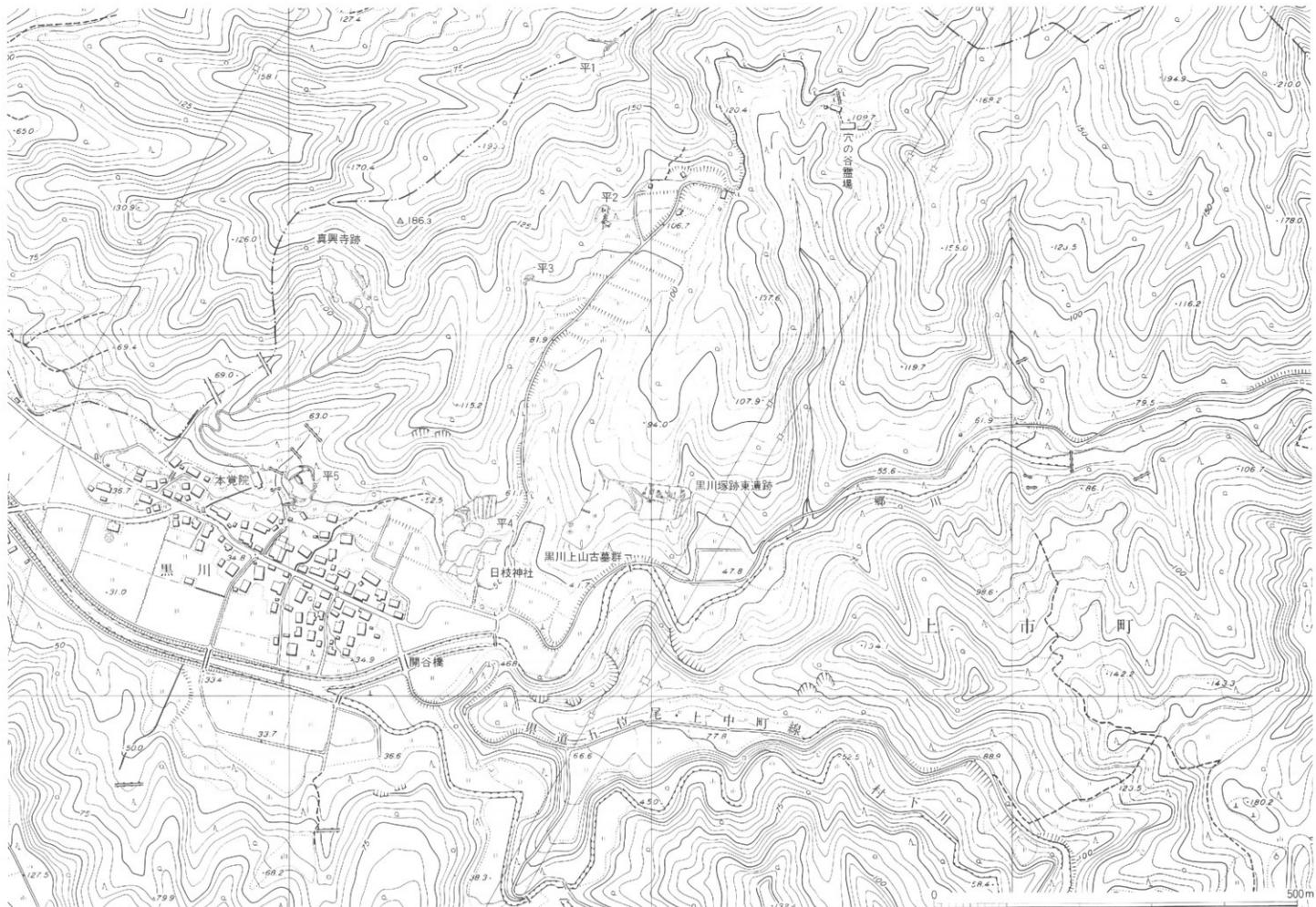
第1図 遺構全図 (縮尺1/300) (遺構キャプションは想定)



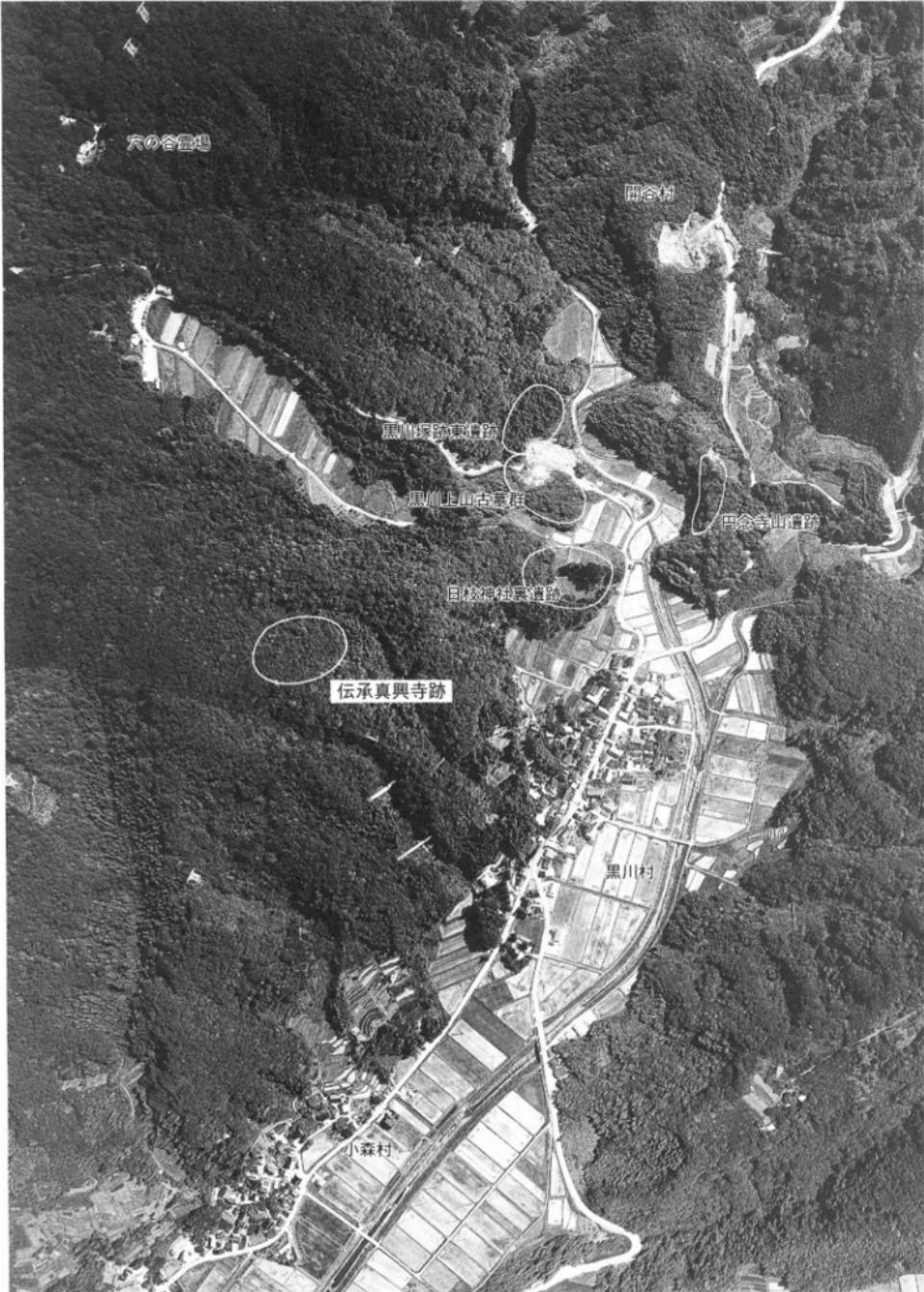
第2図 遺構実測図(縮尺1/100) 平坦面1-VI・平坦面1-VII・平坦面1-VIII



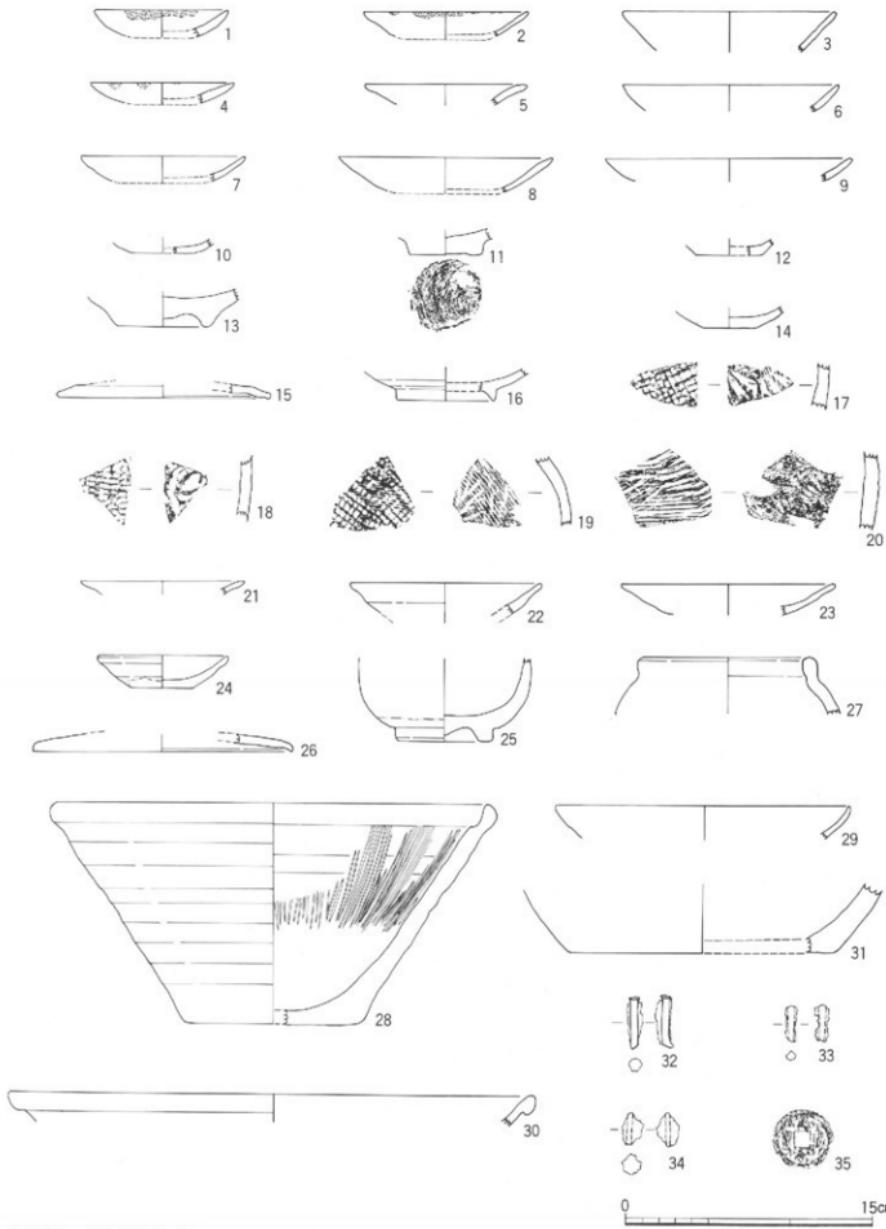
第3図 遺構実測図 (縮尺1/100) 平坦面7・盛土1・盛土2



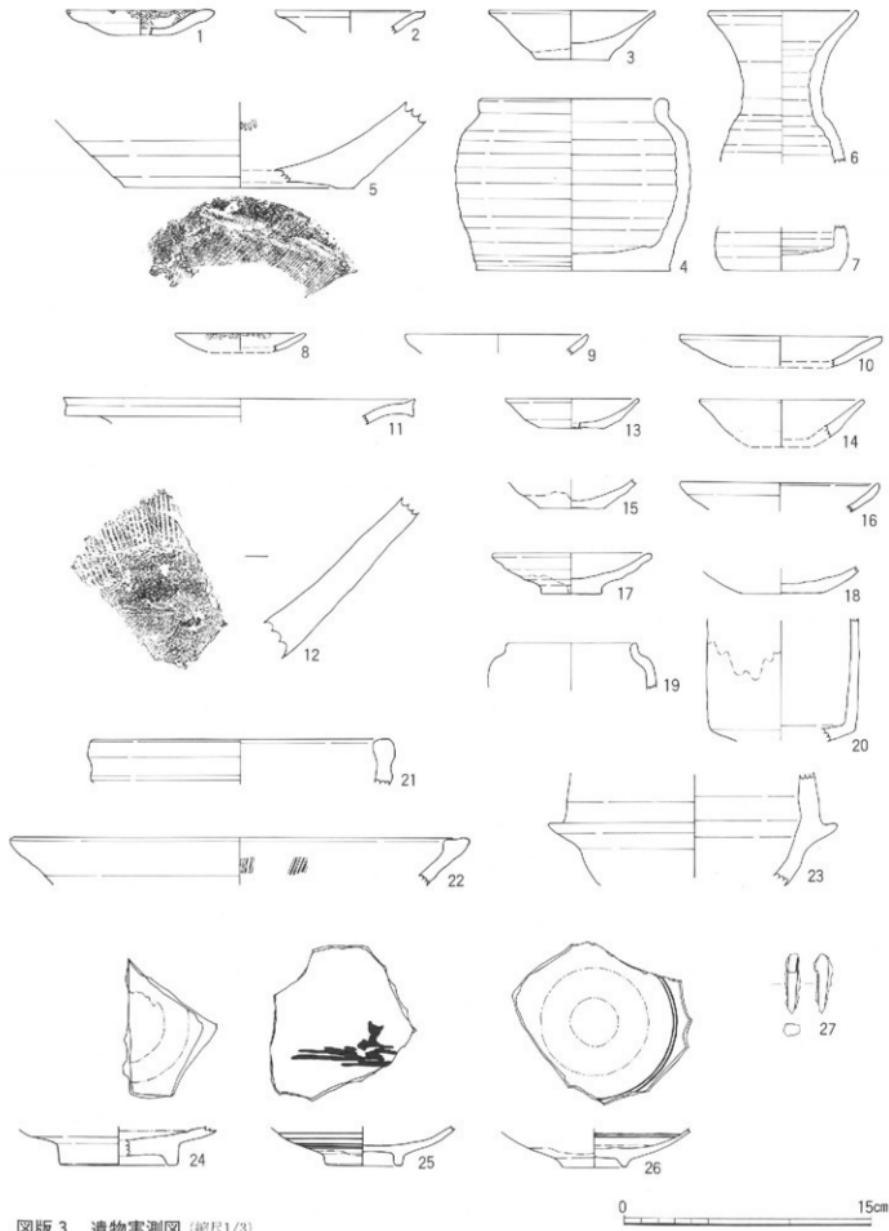
第4図 黒川地区周辺遺跡（塚場関係）分布図（縮尺1/5,000）



図版1 伝承真興寺跡周辺航空写真（約1／6,000）

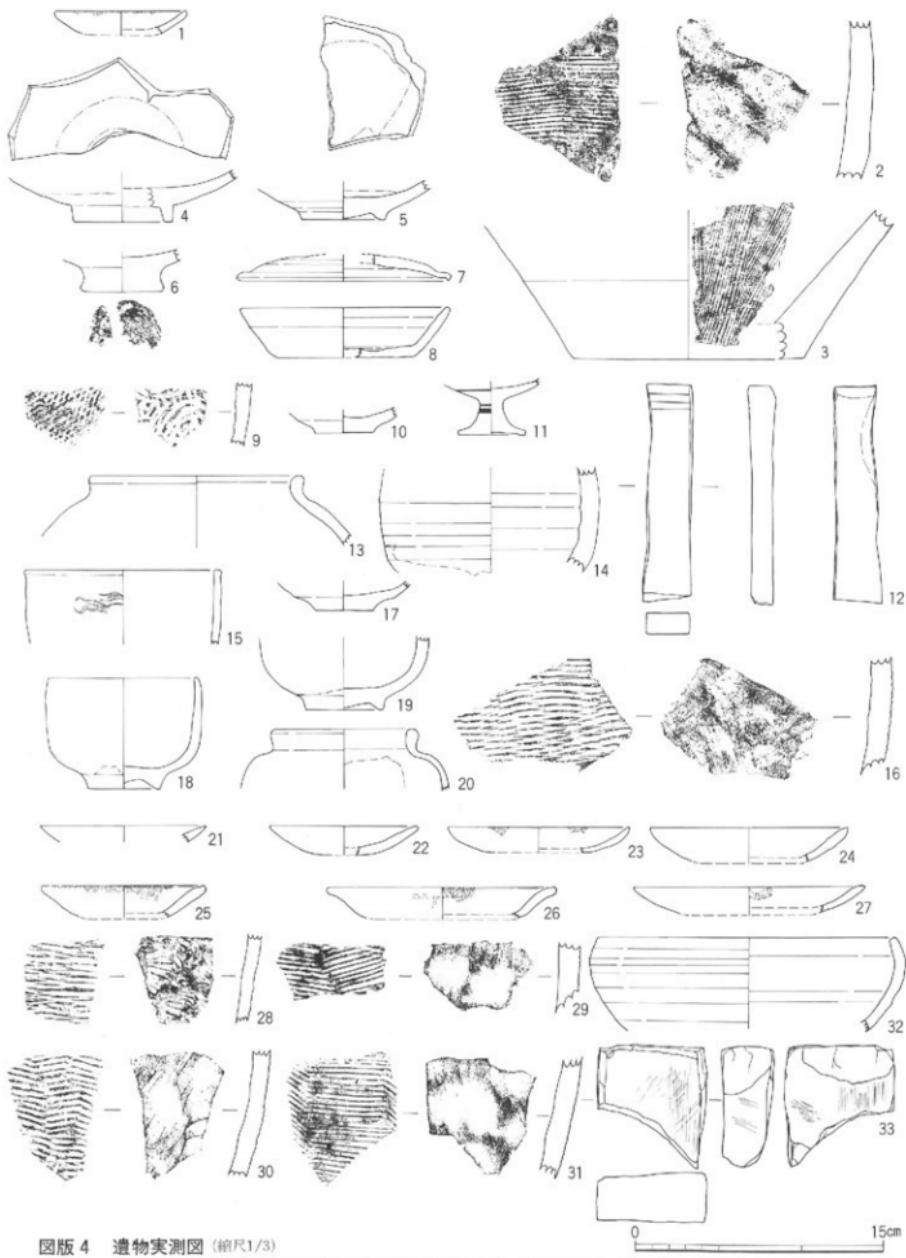


図版 2 遺物実測図 (縮尺1/3, 35のみ1/2)
平坦面1-1・本堂跡(1~35)



図版 3 遺物実測図 (縮尺1/3)

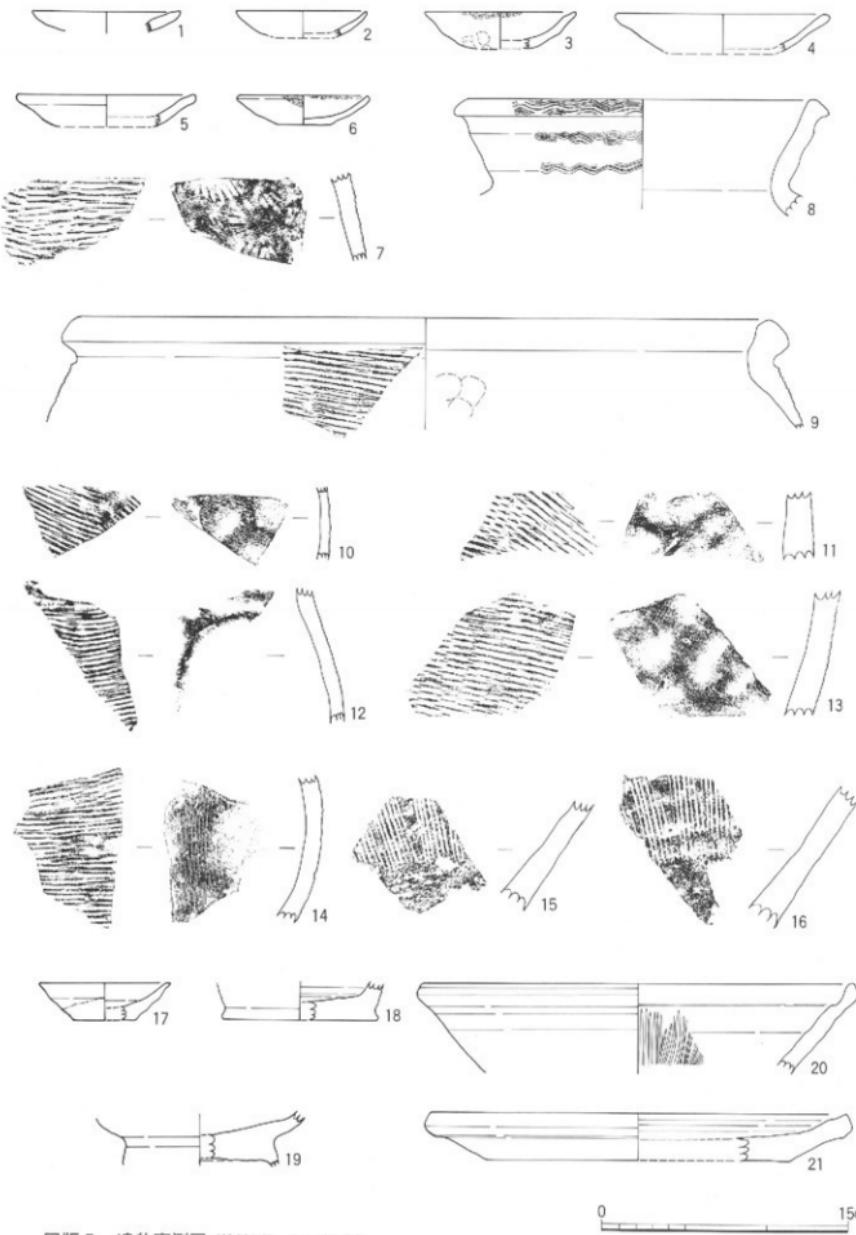
石斧(1), 池2(2), 池1周辺(3・4), 石列1周辺(5~7), 平坦面1-皿(8~27)



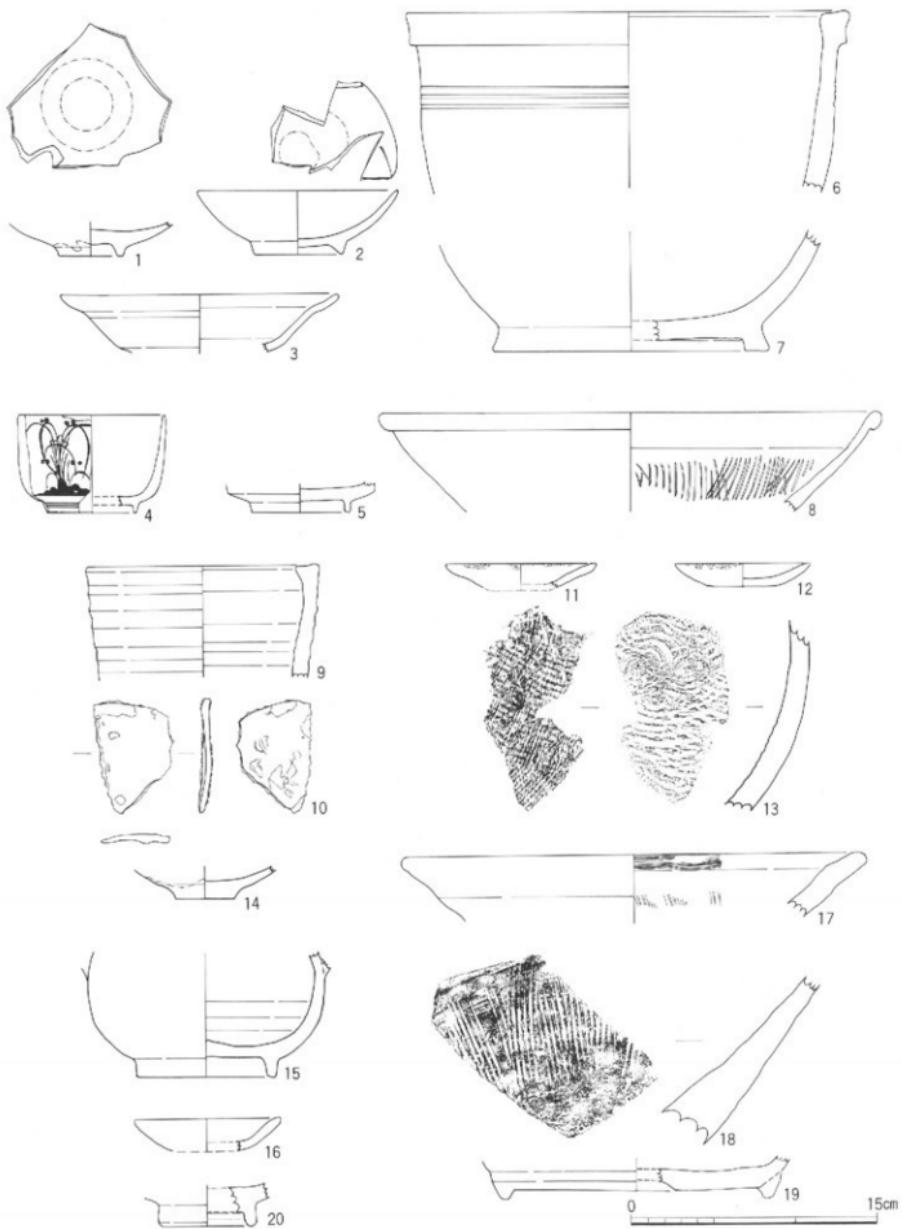
図版 4 遺物実測図 (縮尺1/3)

集石 1 (1~5), 平坦面 1~IV (6~12), 山門石列 (13~15), 山門石組 (16), 平坦面 2 (17~20)

平坦面 1~II (21~23), 平坦面 1~V (24~33)

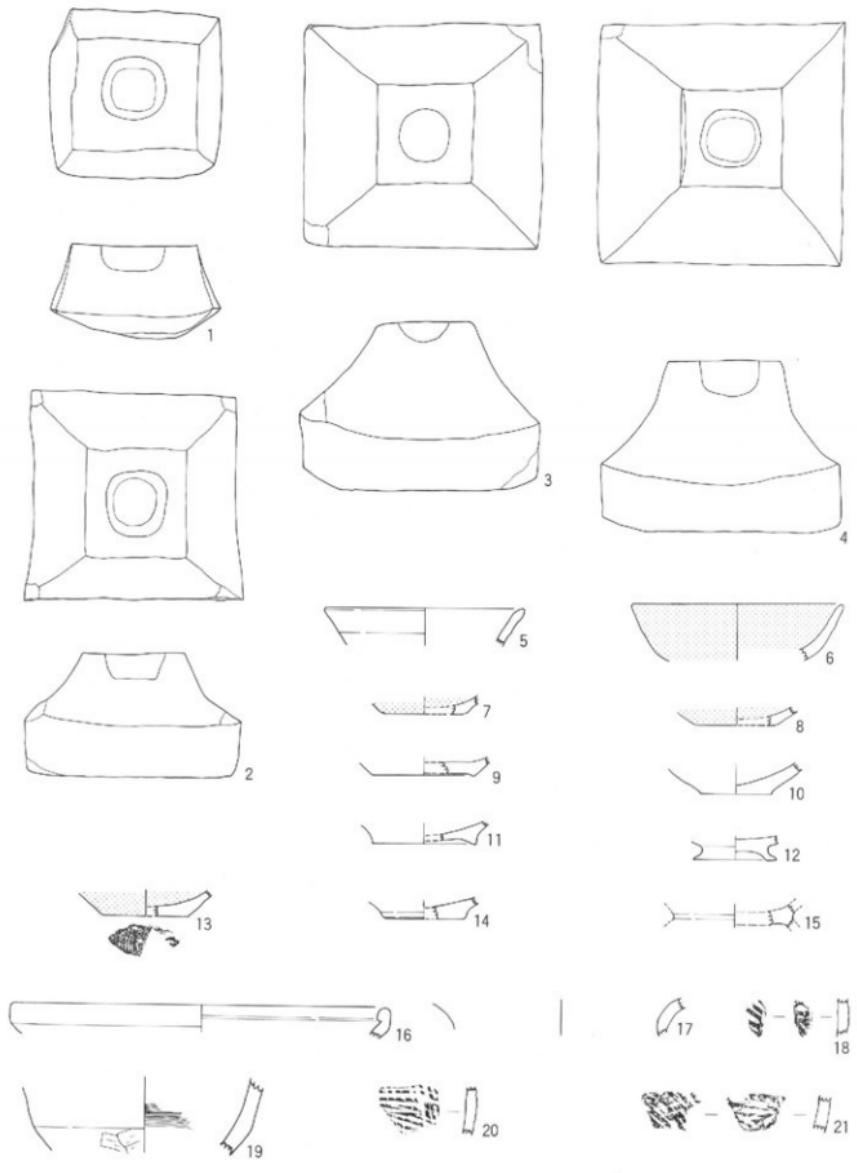


図版5 遺物実測図 (縮尺1/3, 9のみ1/4)
平坦面1-II・V周辺(1~21)

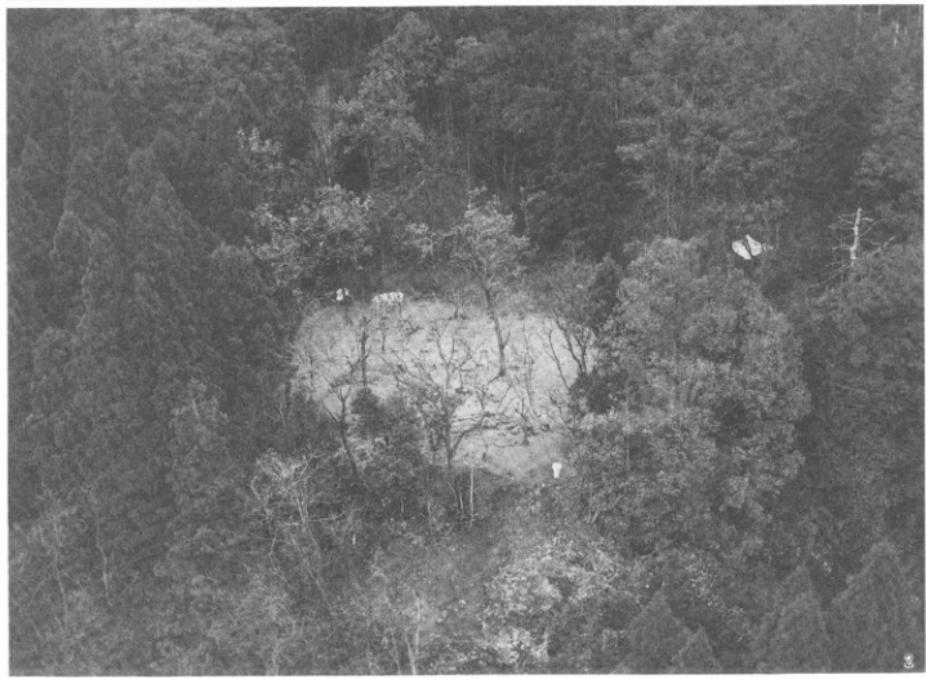


図版 6 遺物実測図 (縮尺1/3)

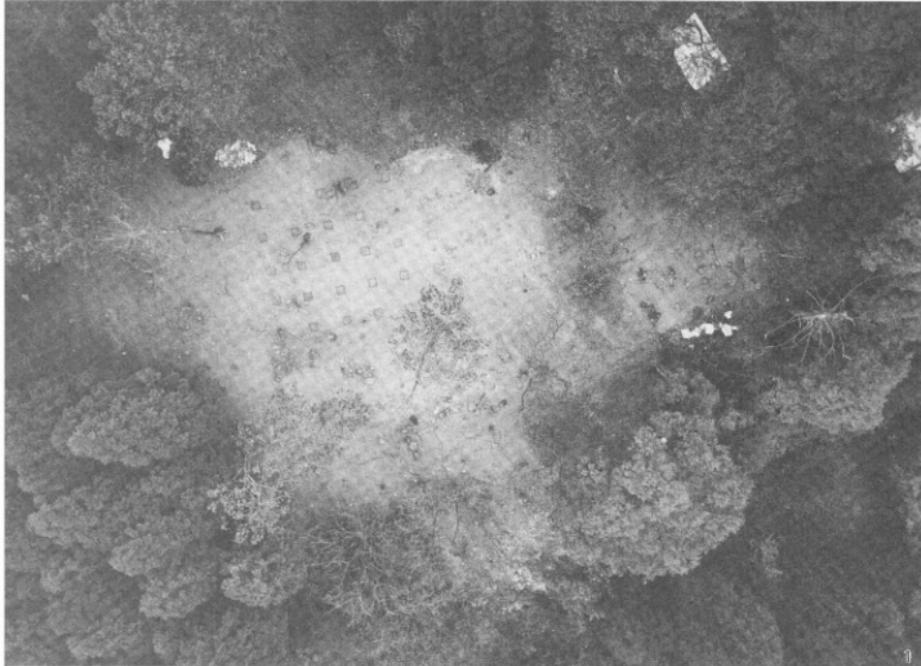
平坦面1~II・V周辺(1~8), 平坦面3・塔跡(9・10), 平坦面5・堂跡(11)
平坦面6(12), 平坦面8(13~15), 平坦面9(16~19), 廃土(20)



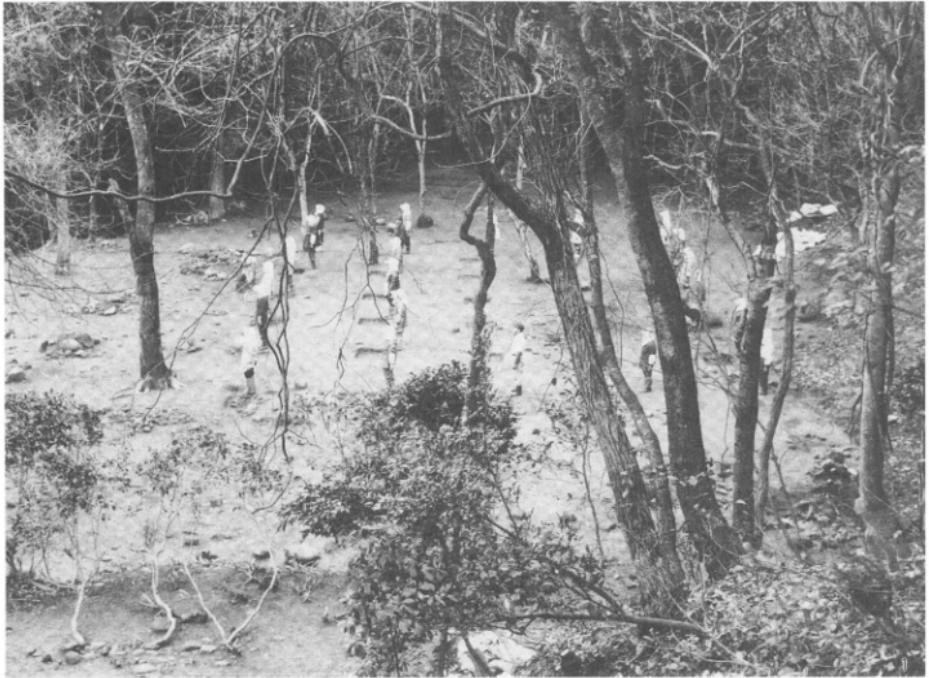
図版7 遺物実測図 (縮尺1/3)
平坦面8(1), 山門石庭(2~4), 分布調査採集遺物(5~21)



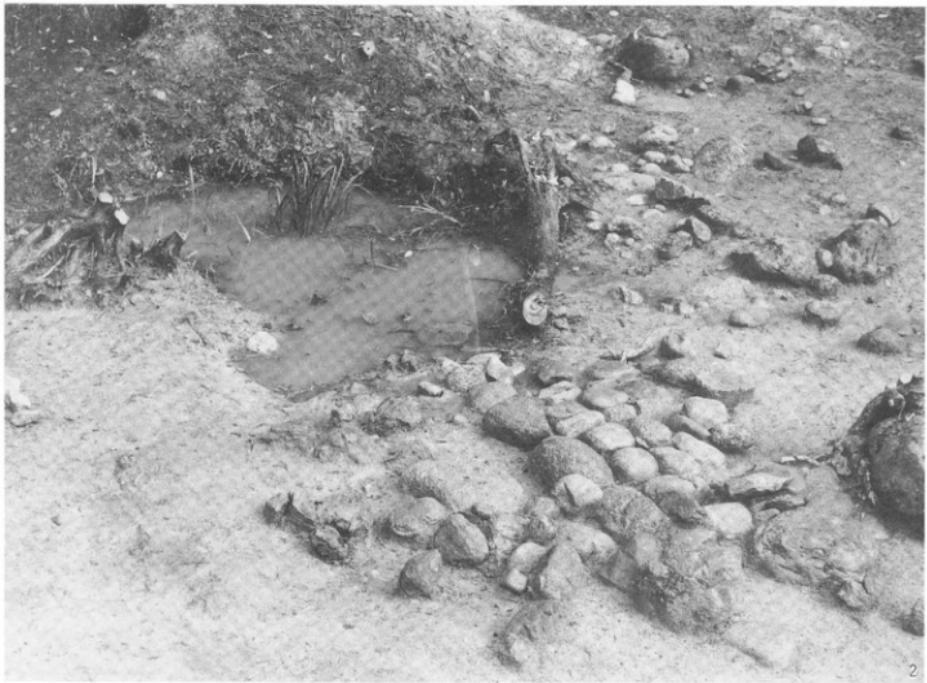
図版 8 1. 遺跡遠景 (南西より・空中写真), 2. 遺跡全景 (南西より・空中写真)



図版9 1.遺跡上空より、2.遺跡東側（塔・堂跡）



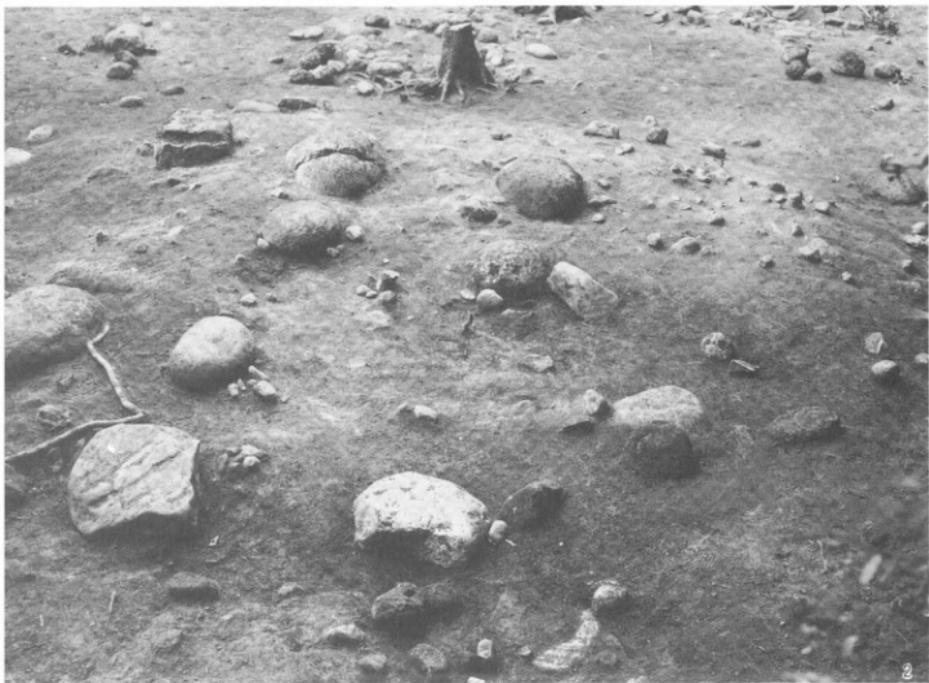
図版10 1.遺跡全景（南東・堂跡より）, 2.本堂跡（北東より）



図版11 1.本堂（東・池跡より）, 2.池跡・石敷（西より）



図版12 1.山門跡より本堂, 2.山門跡（石段・石垣）



図版13 1.塔跡（北西より）, 2.塔跡（南東より）